



Title	北海道における縄文時代の墓と社会 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	藤原, 秀樹
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16492号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94954
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Hideki_Fujiwara_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 藤 原 秀 樹

学位論文題名

北海道における縄文時代の墓と社会

・ 本論文の観点と方法

考古学において、墓は過去の社会を復元するために極めて重要な資料となっている。死者は自らを葬ることができず、必ず別の生者によって葬られる。死者の葬り方には、死者に対する生者の側の評価が反映されており、そこに当時の社会構成員間の関係を理解する手がかりがあると期待されるからである。北海道島の縄文文化に関してもこうした観点から墓の研究が積み重ねられてきているが、従来は副葬品が豊富な縄文後期以降の研究が多く、しかも墓地内の空間構成が把握しやすい一部の遺跡に関心が偏っていた。本研究は、北海道島の縄文文化全体を対象とし、従来の個別研究の成果を土台としながらも悉皆的に収集された埋葬関連資料にもとづいて、長期的な視野から縄文社会の復元を試みた初めての体系的な研究である。

・ 本論文の内容

本論文は、4部から構成される。第Ⅰ部「研究の方法と研究史」では、第1章で墓を介在させて縄文社会の特徴を解明するという目的の提示と時間軸や用語の整理が行われたのち、資料の選択や分類の基準が概述される。これまでの研究の歩みを振り返る第2章では、縄文後期以降の事例を中心に研究が進展してきた一方、埋葬行為の長期的な変遷解明が疎かになっており、土坑墓以外のマイナーな墓についても本州島との関係や具体的な変遷が明確になっていないという問題が指摘される。こうした課題を克服するため、本研究では縄文文化のあらゆる墓の情報を一貫した基準で検討することで、そこに反映された社会の特徴と変化を読み解こうとする問題意識が明示される。

第Ⅱ部「縄文時代葬墓制」では、縄文文化を通して主流となる土坑墓と、それ以外の多様な墓の変遷が論じられる。第3章では土坑墓が取り上げられ、その掘削・構築方法と、性別・年齢と副葬品の関係が明らかにされている。副葬品が豊富な土坑墓が目立つのは後期中葉からで、この時期から土坑墓群の空間的なまとまり（埋葬小群）をもつ墓地が居住域とは異なる場所に造営されるようになる。後期後葉から晩期にかけて埋葬小群の区分はさらに明確となり、副葬品の数を含む墓造営のエラボレーション（労働力の投下度合い）の格差も土坑墓や埋葬小群間で拡大した。さらに、後期中葉から晩期にかけては、当時の社会的なネットワークと関連して、副葬品としてのヒスイ製品に数量や大きさの急速な低下が見られるとともに、それらが特定墓地に偏って出土するようになることも明らかにされた。第4章は、土坑墓以外の多様な埋葬方法を取り上げる。貯蔵穴、貝塚・盛土遺構・住居への埋葬、土器埋設遺構（土器棺墓）、焼人骨の変遷を解明し、こうした多様な埋葬方法が後期中葉で見られなくなることを指摘する。また、理解に混乱をきたしている配石を伴う墓・遺構は、大きさなど客観的な基準をもとに大規模環状列石、環状列石墓・配石墓、配石遺構に整理された。ここまでの検討結果をふまえ、北海道島における縄文の埋葬行為は大きく2つの段階で変遷したと評価される。第一は前期～後期前葉であり、この段階において明確な墓や墓地が各地でほぼ同時に出現し、土坑墓のほかにも多様な形式の墓が併存していた。この時期には被葬者の個人的な特性や死に方などを反映した多様な埋葬が行われており、全体を統一するルールが弱いという意味で相対的に一貫性のない埋葬が行われていたと考えられている。これに対して、後期中葉以降に相当する第二の段階では、埋葬に関わる規制がより強化されたと評価されている。後期前葉から中葉にかけて、埋葬行為を支える原理が個別的・臨機的なものからより社会的な基準にしたがったものへと大きく変化した、これが第Ⅱ部の結論である。

第 III 部「周堤墓の研究」では、北海道島に特徴的で、多くの労力をともなう造営された後期後葉の周堤墓の総合的な研究が展開される。第 5 章では、周堤墓に関する研究史と、5 段階におよぶ周堤墓の変遷が明らかにされる。第 6 章では、石狩低地帯における周堤墓の出現にはサケ科魚類の効果的な捕獲が関係していたことが、出土動物遺体と当時の海面水温から推定されるシロザケの回帰率から論じられる。道北・道東への周堤墓の飛び地的な分布域拡大についても、同じ背景が想定できるという。造営順序、配置、墓標、副葬品などの検討から、周堤墓内の土坑墓は数基からなる列を形成しており、一つの列にはさまざまな性別や年齢階梯の被葬者の墓が含まれ、しかも、こうした列が周堤墓内に複数存在する事例があることも指摘された。周堤墓自体が当時の堅穴住居を模した構造物であり、基本的にその中央部の墓を起点として列をなして埋葬が進行するあり方から、被葬者は世帯の構成員であったと解釈されている。この理解は、集団のアイデンティティー表出に関係する周堤墓の構築方法や墓標の種類からも補強される。周堤墓の大型化現象は列の増加と関係しており、造営主体が世代をまたぐ複数世帯となったことを示す一方、のちにこうした世帯のまとまりよりも上位の社会的紐帯の重要性が高まったことで周堤墓が終焉したと結論づけられる。

第 IV 部「北海道における縄文社会」では、墓を通して見た縄文文化の儀礼と社会についての仮説が提示される。第 7 章では、考古資料にもとづいて埋葬に関わる儀礼過程が復元され、墓地で共飲・共食が行われていた可能性が高いことが明らかにされる。第 8 章では、「子ども」（新生児～思春期）の埋葬や当時の社会像が検討される。「子ども」は年長者と同じ墓地に埋葬されるが、早期から後期前葉までは、副葬品やベンガラ撒布において青年（16～20 歳）以上の人物とは明確に区別されていたことが指摘される。しかし、後期中葉以降では希少材（ヒスイ玉など）の副葬や顔料散布において青年以上の人物と同じような扱いを受ける者が現れ、「子ども」のなかでも格差が拡大した。また、青年以上を含む全ての被葬者の副葬品は、後期中葉まで埋葬小群間で明確な違いはなかったが、周堤墓が大型化する後期後葉の後半以降で格差が顕在化し、周堤墓の土木工事に関わってもその内部に埋葬されない者すらいたと考えられている。この時期の副葬品は、狩猟、呪術、石器製作に関係するものなど、埋葬小群ごとに内容が異なる傾向がある。ただし、エラボレーションの高い墓だけが他と異なる特別な墓地を形成するわけではなく、そうした墓だけが墓地内で特定の埋葬小群を形成するわけでもない。このため、墓に現れた差異を「エリート・非エリート」など垂直的な社会分化モデルで解釈するのではなく、むしろ複数の職能集団の並列を想定すべきであり、この意味で松木武彦氏がアイデアを提示した「ヘテラルキー（多頭的階層）」社会のモデルのほうが説明能力は高いというのが本論文の主張である。各職能を代表する熟練者がそれぞれ同じように尊敬を集める社会であり、後期末のように呪術者が一時的に突出する時期はあるにせよ、後期後葉後半～晩期末はおおむね複数の職能集団が並び立つ状況がつづいたと考えられている。ただし、この理解があてはまるのは北海道島だけであり、本州島東北部では階層化や「ヘテラルキー」社会の発達を示す明確な証拠はないという。第 9 章は、ここまでの議論の要約である。